

太平記巻二「阿新殿事」をめぐる 「武」の道と儒教的倫理の共存

志堅原 あさこ

要旨

本稿は、太平記巻二「長崎新左衛門尉意見事」では対立する「武」の道と儒教的倫理に基づく「孝」と「忠」の思想が、「阿新殿事」では阿新の「武」の実践によって両立させられることを論じる。まず第一節では、長崎新左衛門尉高資と二階堂出羽入道道蘊の議論は、「武」の道と儒教的倫理の対立であると指摘した。次に第二節では、前章段の議論を通じて阿新丸復讐譚を読むことで、武士的な行動によって「武」と儒教的倫理を両立させる阿新の姿を明らかにした。最後に、山伏と阿新の佐渡島脱出の過程を比較検討しながら、阿新丸復讐譚が『太平記』世界で孤立した挿話として扱われることに疑問を呈した。「阿新殿事」を「武士道」以前の中世における「武」の実践として読むことで、荒々しく力強い「武」の道と儒教的倫理が共存する一面を浮び上がらせる。

キーワード：太平記、阿新丸復讐譚、日野国光、武、忠、孝、船戻伝説、仇討

The Coexistence of “Pre-Bushido”[※] and “Confucianism” : The chapter titled “Kumawakadono-no-koto” in “Taiheiki”

ASAKO Shikenbaru

Summary

This paper covers 2 stories. One is that Nagasakisinzhaemonjyo Takasuke argues with Nikaidou Doun and another is that Kumawaka takes revenge on Honma Yamashiro. The author believes that “Pre-Busido” and “Confucianism” could coexist in harmony by in ethical values by referring to the story of the Capter “Kumawaka” in “Taiheiki”. In the first section, I mentioned that “Pre-Busido” and “Confucianism” were “conflicting values” each other with a consideration on the argument between “Takasuke and Doun”. In the second section, On the other hands I mentioned that “Pre-Bushido” and “Confucianism” could coexist inethical values by referring to the story of Kumawaka taking revenge on Honma Saburo. Finally, in the third section, I compared the process of the Kumawaka and Yamabushi’s escape story from Sado Island with the Yamabushi’s miracle legend. I doubt that the Kumawaka story is treated as being independent from “Taiheiki” and that Kumawaka is regarded as a nation loyal subject. I believe that Kumawaka’s practice in accordance with ethical of “Bu” demonstrates an aspect of the coexistence in ethical values between “Pre-Bushdo” and “Confucianism”.

Keywords: “Taiheiki”, “The story of Kumawaka taking revenge on Honma Saburo, Hino Kunimistu, “Pre-Bushido”, be loyal to one’s lord, be good to one’s parents, The Yamabushi’s miracle legend

※ “Pre-Busido” means ethical code of “Bu” existed in the Middle Ages before “Busido” was established in Edo era.

はじめに

『太平記』巻二に載せられる阿新丸復讐譚は、日野資朝の子息阿新が、資朝を斬った本間山城入道の子息本間三郎に仇討する話である。年代記的な『太平記』のなかでも異色であり、話の後半では山伏が登場し、山伏の法力によって阿新は追手からの逃れたと語られる。山伏を乗せずに出航した船が法力で戻る「船戻伝説」は、越前地方にあった伝説である。『太平記』の筋を面白くするために阿新の物語と結びつけられたのであり、このことは当時の国民がこの手の伝説を喜んだことを示すと指摘される^一。「阿新殿事」の異同を古本系に属する神田本と西源院本で比較する長谷川端氏は、「本文異同の比較的部分をつないで読んでゆくと、佐土ヶ島へ下り、願い果たせず僅かに父の恨みを打つという孝子譚がこの阿新説話の骨子であったように思われる」と述べ、「阿新殿事」は、元來資朝父子の『恩愛ノ道』から『忠臣孝子ノ義』を説く孝子譚が、神田本の如き本文として作られ、それが口語りの中で山伏靈驗譚を取り込みながら発展したものといえよう^二と論じる^三。他に青木正次氏は、歴史的には佐渡への配流と誅殺が簡略的に記される日野資朝が記録の世界から「物語伝承の世界を構築することになった」として、「忠孝のかがみの如き阿新丸の物語は、太平記に必要なものであったことを知る」と述べる^四。

『太平記』は、巻一から巻二の第一部（儒教的道義論）、巻一三から巻二一の第二部（仏教的因果応報論）、巻二三から巻四〇の第三部（儒教的道義論）や「仏教的因果応報論」が破綻した非条理な世界）の三部に分けられる^四。「阿新殿事」は第一部に属し、先学の

指摘のように「孝」の思想が明確に打ち出されている。だが本章段は、「長崎新左衛門尉意見事」に「付けたり」となって一節を成す。「長崎新左衛門尉意見事」では、「武」の道と儒教の「忠」の倫理が対立する議論が展開される。従来、阿新丸復讐譚は作爲的に『太平記』に組み込まれた挿話として解明される傾向にあるが、前章段の流れを取り込みながら読むことで、「武」と儒教的倫理を両立させる一面を確認できるのではないか。

諸本については、西源院本の注釈が岩波文庫（兵藤裕巳）でなされ、流布本の注釈が日本古典文学大系（後藤丹治、金田喜三郎、岡見正雄）と日本古典集成（山下宏明）でなされ、天正本の注釈が日本古典文学全集（長谷川端）でなされている^五。阿新丸復讐譚が語られる「阿新殿事」の章段には、かなりの異同が確認できる。

本稿は、長谷川氏に学びつつ、「長崎新左衛門尉意見事付阿新殿事」の章段を西源院本、流布本、天正本のテキストで比較し、「武」の道と儒教的倫理が、阿新丸復讐譚では共存していると論じるものである。

一、「武」の道と「臣」の倫理の対立

「長崎新左衛門尉意見事」^六は諸本で大きな異同はないが、天正本の末尾では高資に対する批判が語られる^七。まず、新左衛門尉高資と二階堂出羽入道道蘊の論争を確認する。

後醍醐天皇の倒幕の企てが露見して後も、御位が持明院天皇に移らないため、持明院天皇から処置を促された相模入道は頭人、評定衆を集めて、意見を問う。皆が様々に考えを巡らし、口を閉ざすなか、

長崎入道の子息高資が次のように意見する。

「前年、土岐十郎が討たれし時、御位を改め申さるべかりしを、朝憲に憚つて、その沙汰緩なりしによつて、この事なほ未だ休まず。乱を撥つて治を致すは、武の一徳なり。速やかに当今を遠国に遷しまらせ、大塔宮を不返の遠流に処し奉り、俊基、資朝以下の乱臣を、一々に誅せらるるより外の儀は、あるべしとも存じ候はず」と、憚る所なく申しけるを、…(省略)

(西源院本『太平記』、引用は岩波文庫による)

元徳元年の土岐十郎が討たれた際に倒幕計画が露見したにも関わらず、幕府は朝廷の権威を恐れて強行策をとらなかつた。そのため、後醍醐天皇は今も謀反を諦めてはいない。今度こそ「武」力の徳をもつて世を治めるべきと主張する。高資に対し、道蘊は次のように発言する。

「この儀、尤もしかるべく聞こえ候へども、退いて愚案を廻らすに、武家、権を抱つてすでに百六十余年、威四海に及び、運累葉を耀かすこと、更に他事なし。ただ上一人を仰ぎ奉りて、忠貞に私なく、下百姓を撫でて、政に施しあるゆゑなり。…(中略) …「君君たらずと雖も、臣以て臣たらずんばあるべからず」と云へり。

(西源院本)

道蘊は後醍醐天皇の寵臣二人を捕え、天皇が帰依する高僧三人を流罪に処したことは、臣である武家として悪行といえ、その上、後醍醐天皇を遠くの地に遷し、大塔宮までも流罪に処すことは、天、山門(延暦寺)の怒りにつながり、幕府の運にも関わるという。『古文孝経』のことは引き、「帝が帝として相応しくない行動に及んだとしても、臣が臣下としての道に背いて良いとは言えない」と「忠」に基づく「臣」の道を主張する。道蘊は、巻一「資朝・俊基関東下向事付御告文事」において、後醍醐天皇の一度目の倒幕計画が露見した際、万里小路宣房が勅使として告文を鎌倉へ渡したときにも「天子、武臣に対してちきに告文を下されたる事、異国にもわが朝にも、いまだその例を承らず」と朝廷に返すように北条高時を諫めていた。「君臣上下の礼」(儒教的倫理)を深く重んじる人物である。道蘊は『古文孝経』のことは引いているが、本来「忠」に対して「孝」はより本源的であり、「忠」は「孝」から派生すると考えられていた^{九一〇}。「父子天合」、「君臣義合」として、前者は先天的な人間関係、後者は後天的なものと位置づけられたのである。道蘊のことはから読みとられる思想は、「孝」から派生した「忠」に色濃く確認できる^{一一}。

道蘊の意見を聞いた高資は、人々の意見も待たずに、怒りを露わに反論する。

文武 揆 一つなりと云へども、用捨時に異なるべし。静かなる世には、文を以て治め、乱れたる時には、武を以て静む。ゆゑに、戦国の時は、孔孟用ゐるに足らず。太平の世は、干戈用ゐるなき

に似たり。事すでに急に当たれり。武を以て治むべき時なり。：
 (中略) ……されば、古典に、「君、臣を視ること土芥の如くする則
 は、臣、君を視ること寇讎の如し」と云へり。

(西源院本)

文も武も治世に志はあるが、時勢によって用い方は異なる、戦国の時代には武力をもつて早急に静める必要がある。戦国の時代に孔子、孟子の説く君子の道は用いられず、太平の世には武器を用いることはないとして武力行使を主張する。つづけて、道蘊に対抗して『孟子』(「君之視臣如土芥。則臣視君如寇讎。」)を引きながら、繰り返し後醍醐天皇側への処罰を訴える。儒学思想書である『孟子』は、徳をもたずに悪政を行う主君を帝位から追放する「放伐」を是認する(「曰。君有大過則諫。反覆之而不聽。則易位。」)。高資の主張する「武」は「文」の道に對置される武力であり、主君への絶対服従的な「忠」に基づく「臣」の倫理とは相容れない。中世の「主従の倫理」について大隅和雄氏は、武家社会は戦闘集団としては主君の命には絶対服従し、主人のために身を惜しまず戦うことが求められた一方、日常における主従関係では、「相互の契約という性格」を持つており、「主君が従者を保護する義務を負えなくなった場合には、従者は主君の命に背いても構わないという、双務契約的な考えが生まれ、主人と従者の力の差が少ない場合には、一方的に主人の命令を通すことはできなくなる」と述べる^{二二}。高資の主張は、中世の「主従の倫理」に基づく。

二人の論争は、乱世における「武」の道と「忠」の倫理の対立と

もみることができよう。卷一「序」で示される「儒教的君臣論」の思想^{二三}の上に「僉議論争形式」^{二四}として成立している。「序」を引用する。

蒙竊かに古今の變化を探つて、安危の所由を察るに、覆つて外なきは天の徳なり。明君これに依りて國家を保つ。載せて棄つることなきは地の道なり。良臣これに則つて社稷を守る。若しその徳欠くる則は、位ありと雖も持たず。所謂夏の桀は南巢に走り、殷の紂は牧野に敗る。その道違ふ則は、威ありと雖も保たず。曾て聴く、趙高は咸陽に死し、祿山は鳳翔に亡ぶと。ここを以て、前聖慎んで法を将来に垂るることを得たり。後昆顧みて誠めを既往に取らざらんや。

(西源院本)

倒幕計画を企てた後醍醐天皇(君主)への幕府(臣下)の対処、と『太平記』世界内での実際的な場では、君臣各々の道徳が実践されること
 はない。

居合わせた頭人、評定衆は、いきり立つ高資に追従して賛成するた
 め、道蘊は退出する。

：居長高になつて申されける間、当座の頭人、評定衆、権勢
 にや恐れけん、また思案にや落ちけん、皆この儀に同じければ、
 道蘊、再往の忠言に及ばず、眉を擧めて退出す。

(西源院本)

：居長高二成テ申ケル間、當座ノ頭人・評定衆、權勢ニヤ阿ケン、又愚案ニヤ落ケン、皆此義ニ同ジケレバ、道蘊再往ノ忠言ニ及バズ眉ヲ擧テ退出ス。

(流布本『太平記』、引用は日本古典文学大系による)

：居長高になつて申しければ、当座の頭人・評定衆も、權勢にや阿りけん、また愚案にや墮ちけん、皆この議に同じければ、道蘊再往の忠言に及ばず、眉を擧めて退出す。後に思ひ合はすれば、これぞ誠の諫言なりけると、後悔すれどもその甲斐もなし。

(天正本『太平記』、引用は日本古典文学全集による)

倒幕計画を企図した帝に対して、臣としての道を違えて流罪を訴える臣下の意見が通る乱世では、道蘊の主張は「太平の世」にしか通じない観念的なものとして退けられる。中世の「戦国の世」では、自力救済の手段である「武」力の主張が通された。

天正本では、高資への批判の添加、後に起こる唐崎の乱を道蘊は見通していたと仄めかす一文が語られる。『太平記』は挿話が物語の構想を予告する方法をよく用いるが、天正本では道蘊への評価の一文が「唐崎浜合戦の事」を告げていよう。高資の主張は、西源院本では「愚案」とされたが、流布本と天正本では「愚案」と批判される。これは、高資(武)と道蘊(忠)の論争において高資の主張が採用されたことを西源院本が擁護し、流布本、天正本が批判しているのではない。これにより、作者の意図の如何を問わず西源院本の阿新丸は法師的、流

布本では武士的、天正本では忠臣として描き出される。

高資の意見が通り、次章段「阿新殿事」では日野資朝が本間三郎に斬られる。

二. 阿新丸復讐譚 「孝」・「忠」・「武」

「阿新殿事」の構成は、六つに大別できる。

- ① 阿新が資朝を尋ねて佐渡に下る
- ② 本間山城入道が父子の対面を許さない
- ③ 資朝が斬られる
- ④ 阿新が父の敵として本間三郎を討つ
- ⑤ 追手から逃げる阿新は山伏に出会う
- ⑥ 阿新は山伏の靈験により佐渡を脱出する

構成①を考察する。資朝が誅せられると京に伝わり、阿新は母に暇乞いする。

母、頻りに諫めて留め給ひけるは、「二日路、二日路の国にてもなし。佐渡とやらんは島国にて、万里が澳にあんなるに、かひがひしき若党をも連れずして、ただ独り尋ね下らん、行き着くまでもあるまじ。道にて、思ひの外なる事あつて命を失ふか、また人を売り買ふ所なれば、売られて人の僕になつて、習はぬ業に使はれん時は、いかに嘆き悲しむとも、叶ふまじ。」

(西源院本)

母御頻ニ諫テ、「佐渡トヤランハ、人毛通ハ又怖シキ嶋トコソ聞
レ。日數ヲ經ル道ナレバイカントシテカ下ベキ。其上汝ニサヘ
離テハ、一日片時モ命存ベシトモ覺ヘズ。」ト、泣悲テ止ケ
レバ、…(省略)

(流布本)

母上、「思ひ奇らぬ事かな」とて、様々に制して止め給ひければ、
…(省略)

(天正本)

佐渡島について、西源院本では人買商人が横行したと説明的に語られ
るが、流布本では「人毛通ハ又怖シキ嶋」と簡略化され、天正本では
詳細は語られない。本引用における西源院本と流布本の異同に関して
は、流布本の成立背景が影響していると考えられる。小秋元段氏によ
れば、流布本の成立前段階に位置づけられる室町期の写本である梵舜
本を底本にする慶長七年刊本では西源院本系によることで母が詳細に
諫めるが、本稿で引用する流布本の底本となった慶長八年刊本は南都
本系によることで慶長七年刊本の長大な異同を改修したと指摘されて
いる^{一五}。西源院本では、このあと阿新が母親には内緒で従者に佐渡
へ下ることを話し、密かに出立を試みたと言られる。だが、流布本、
天正本では従者を伴って出立したとしか語られない。西源院本は流布
本、天正本には見られない母の嘆きを強調する特徴を有しており、阿
新が母の制止を振りきってまでも出立する、と父子の情が高められる

効果を発揮している。

佐渡島へ到着した阿新は、本間の邸へ赴く。邸から出て来た僧に、「こ
れは、召人にてこれに居ゑられて候ふ日野中納言の二子にて候ふが、
近き程に切られ給ふべしと聞え候ひし間、今一度父の卿を見奉らん
ために、遙々と都より尋ね下つて候ふ。この由を、本間殿に、僧の御
慈悲にて、子細なきやうに申し入れて給はり候へ」^{一六}と事情を語る。
僧は哀れに思い、本間へと取り次いだ。以上は構成②に該当するのだ
が、本間が父子の対面を許さないことを語る順序は諸本によつて異な
る^{一七}。

元弘二年五月二九日の暮頃、刑に臨む資朝は敷皮の上に座して辞世
の頌を書く。西源院本(と流布本)、天正本では資朝の最期を次のよ
うに描き出す^{一八}。

年号月日の下に、名字を書き、筆を差し置き給へば、太刀取り
後ろに廻ると見えしかば、御頸前に落ちけれども、質はなほ、本
の如くに座せられたり。

(西源院本)

「誇張的表現が、不屈な人間魂を象徴するかのようである」^{一九}と小
松茂人氏も指摘するように、資朝の死は粗暴で野蛮な「武」の最期と
して強く印象づけられる。だが、天正本では大きく異なる。

五月二十九日和翁、と書いて筆を抛げ給へば、切手後へ廻るとこ

そ見しに、前に落ちける我が頭を自ら抱きて臥し給ふ。夢現と覺えたり。

(天正本)

ゆつたりと落ち着いて死に向かう姿が描かれ、「武」の印象はない。天正本では、本場面の直前に資朝が元来学業に励んでいたこと、辞世の頃の前に阿新にことばを遺す内容が増補される。そこで資朝は「汝が為に言を為す。秋霜三尺曾て貞松を埋めず。土之を見て眼睛を豁開し、洒々落々として乾坤の間に独立す」と記しており、天正本は資朝を雑念のない悟りの境地に近い人物として描き出す。頸をはねられても、なお座り続け不撓の精神を見せつける武士的な資朝と、落とされた頭を受け止めてうつ伏せになって死を受け入れる資朝は対照的である。

河原での葬式後、僧から資朝の遺骨を受け取った阿新は、高野山に納めるように言つて従者を京に帰す。天正本は本場面にも増補する。

阿新殿これを一目見給ひて、取る手もたゆく倒れ臥し、「都より遙々と尋ね下りし甲斐もなく、今生の対面つひに叶はで、今かかる遺骨を見奉ることよ。こはそも夢かや現かや。夢ならばとく覺めよ」と、まだ幼き声をあげ、をめき叫び給ひしかば、親子ならではげにこのきはに誰かかやうに思ふべき。恩愛の道は高き卑しきに替らざりけりとて、聞く人も泪をぞ催しける。

(天正本)

構成②で、阿新に視点がおかれ、対面が許されぬ悲しみと本間への非難が語られた際にも、「聞く人も袖をぞぬらしける」と常套句がおかれた。本場面からも、「恩愛の道」を強調して情緒的な話とする傾向が確認できる。

従者と別れた阿新は復讐の機会を待つため、仮病をつかつて本間の邸に一人留まる。その目論見の語られ方も異なるので、引いておきたい。

阿新殿の虚病、いかなる子細ぞと後に思ひ合はするに、さても、本間が余りに情けなく、父を一目見せざりつる事の恨めしさよ、悪き者かなと、骨髄徹りて思はれければ、今は、父の別れは次にして、ひたすら本間を恨み、思ひ知らせてくれんずるものをと、幼稚の心に思ひ企てけるをば、これを知る者ぞなかりける。

(西源院本)

資朝が誅殺された仇を討つことは二の次であり、生き別れにさせた本間への恨みをはらす決意が語られる。本間が情けをもたない、親子の恩愛を理解できない非情な人物であることが強調されている。

是ハ本間ガ情ナク、父ヲ今生ニテ我ニ見セザリツル鬱憤ヲ散ゼント思フ故也。

(流布本)

流布本では、生き別れにさせた本間への恨みをはらす決心が簡潔に述べられる。構成②の本間が対面を許さないことを非難する作者は饒舌であつたが、資朝や阿新に視点がおかれるわけではないため、情に訴える要素は西源院本や天正本に比して少ない。

これは本間が情けなく父の対面を許さざりし事、恨み骨髓に入りて忍びがたく思ひ給へば、入道父子が間に、一人打つて腹切らんと、思ひ定めてぞ逗留せられける。

(天正本)

他にはみられない、仇討以前から切腹する決意つまり武士的な姿が認められる。

阿新は四、五日間仮病を装い、夜になれば本間の寢所を覗き、時機をうかがつていた。そして、或る雨風の激しい夜に仇討を決行する。しかし、普段の寢所に本間の姿は見えない。どこに臥しているかと探す矢先、資朝の頸を切つた三郎の寢所に辿り着く。流布本では「ヨシヤ是モ時ニ取テハ親ノ敵也」、天正本でも大方同様に「これまた時にとつて親の敵なれば、父入道に劣るまじと思ひ給ひて」と語られるが、西源院本では再び、恨みが強調される。

これこそ親の敵よ。子の頸は親の頸なり。これこそ幸ひよ。同じくは、子を殺して、父本間に物を思はせ、わが親に別れたる悲しさを思ひ知らすべしと悦びて、障子を開けんとしけ

るが、燭明らかなり。

(西源院本)

復讐を目論む阿新が、資朝誅殺の仇を二の次にしたことを受ける箇所である。「目には目を、齒には齒を」の同態復讐法のように子息である三郎を打つて、父本間に恩愛の道の悲しさを味わわせてやろうとの考えが語られる。

武器を持たない阿新は、三郎の枕元に太刀と刀を見つけてるが、寢所には燭が灯つており、気づかれてしまう恐れから思うように中へ入ることができない。そこへ丁度、季節が夏であつたために明かりに誘われた蛾が障子に止まっていることに気づく。阿新は障子戸を少し開け、蛾を内に入れて、燭を消させることに成功する。蛾の助けにより事態が進展する展開は劇的に構成されており、復讐譚の最高点は仇討の瞬間にあることは言うまでもない。

阿新が三郎を討つ様が語られるが、流布本と天正本の描写はほとんど同じであるのに対して西源院本は異なるので、ここでは西源院本と流布本の二つを引く。

：阿新殿は、内に入り、本間三郎が枕に立つたる刀を取つて、腰に差し、太刀を取つて、鞘をはづし、三郎が胸を突き通し、返す太刀にて喉笛を切つて、心閑かに後ろの竹原に陰れにけり。

(西源院本)

今ハ右トウレシクテ、本間三郎杵杖ニ立寄テ探ルニ、太刀毛刀
 毛枕ニ有テ、主ハイタク寝入タリ。先刀ヲ取テ腰ニサシ、太刀
 ヲ抜テ心モトニ指當テ、寝タル者ヲ殺ハ死人ニ同ジケレバ、驚
 サント思テ、先足ニテ枕ヲハタトゾ蹴タリケル。ケラレテ驚ク處
 ヲ、一ノ太刀ニ躰ノ上ヲ置マデツツキトヨシ、返ス太刀ニ喉ヲ
 指切テ、心閑ニ後ノ竹原ノ中ヘゾカクレケル。

(流布本)

西源院本では復讐心に燃える阿新を語るが、流布本と天正本では、
 粗暴で野蛮な、一方では力強い阿新の新たな一面が描き出される。意
 識ある敵を殺害しなければ命をとったことにはならないとは、仇に情
 けをかけるようでありながら、また何とも残酷で武士的だ。流布本、
 天正本は説明的ではないが、激情的な仇討によって阿新の恨みのほど
 は思い知らされる。

何時何処においても油断してはならない心を持ち合わせない三郎
 は「あつ」と声をあげて息絶える。断末魔を聞きつけた番衆は阿新の
 所業と気づき、阿新は追われる身となった。

…阿新殿は、親の敵をば討ちつ、今は遁れつべき程ならば逃げて、
 命恙なくば、法師になり、父の菩提をこそ弔はめと思ひなつて、
 口二丈の堀の上へ覆ひ懸かる大竹の末へ、登り拳がると等しく、
 竹の末堀の向かひの岸に傾きければ、飛び下りて地に着く。

(西源院本)

阿新ハ竹原ノ中ニ隠レナガラ、今ハ何クヘカ遁ルベキ。人手ニ懸
 ランヨリハ、自害ヲセバヤト思ハレケルガ、悪シト思親ノ敵ヲ
 バ討ツ、今ハ何モシテ命ヲ全シテ、君ノ御用ニモ立、父ノ素意
 ヲモ達シタランコソ忠臣孝子ノ儀ニテモアランズレ、…(中略)
 …サラバ是ヲ橋ニシテ渡ンヨト思テ、堀ノ上ニ末ナビキタル呉竹
 ノ梢ヘサラくト登タレバ、竹ノ末堀ノ向ヘナビキ伏テ、ヤスく
 ト堀ヲバ越テゲリ。

(流布本)

阿新殿は竹の中に隠れながら、云ひ甲斐なき者の手にかからん
 よりは腹を切らんと思ひ給ひけるが、待てしばし、悪しと思ひつ
 る父の敵をば打ちつ、今はいかにも身を全して、君の御用にも
 立ち、親の本意を達したらんこそ、誠に忠臣孝子の儀にてもあ
 るべけん、もしやとひとまづ落ちて見ばやと思ひ返し…(中略)
 …さらばこれを橋にして渡さんと思ひて、岸の上に大なる呉竹の
 少しなびきたるその梢へ、さらさらと登りたれば、竹の末堀の向
 ひへ靡き伏して、やすやすと堀をば越えてけり。

(天正本)

波線部の本間邸を脱出する描写は、永積安明氏^三や葛綿正一氏^三
 によって魅力的に解釈されている。流布本と天正本には「サラサラ」
 「ヤスヤス」といった極めて語り物的な擬態語が用いられている。傍
 線部を比較すると、西源院本の阿新像は資朝を弔おうとすることで法

師的に描かれるが、流布本と天正本の阿新は敵にかかって死ぬよりも自害すべきとの考えをもち、武士的に描かれる。加えて、「父ノ素意」「親の本意」を達そうとする「孝」に基づく忠臣の思想もみられる。西源院本では、出立する阿新を母親が止める際にも、「父の跡を継ぎ、菩提をも引ひ給ふべし」と、憑もしく覚え侍りしに」と他にはないことばが語られ、法師的役割が担わされていた。流布本と天正本からは、「武」の道と合わせて後醍醐天皇のもとで倒幕する父の志を達するこそ「忠」にかなうとの考え、即ち儒教的倫理が読み取られる。

「長崎新左衛門尉意見事」で高資が主張した「武」の道を、西源院本は「思案」とし、流布本と天正本は「愚案」としたことを思い起こしたい。「武」の道について、阿新を法師的に描く西源院本は否定的でないが、阿新を武士的に描く流布本と天正本は否定的であった。「武」の道とは、一見「武士道」と解することが可能に思われるが、君臣の関係を示す「忠」とは必ずしも重なるものではない。「武士道」^{二四}における「忠義」の精神といえ、主君のために命を惜しまない自己犠牲的な上下関係を示すこともあるが、「武士道」という言葉が、武士の道義的観念や思想を明確に表現するようになったのは近世からである。中世の武士の道は、「ものものふの道」や「弓矢の道」と称され、それは「戦場において武士がわきまえておくべき作法」や「名誉の観念」であった^{二五}。そして、中世武士の名誉の観念を形成していたのは、武勇の振る舞いだけでなく、その振る舞いのうえにある「主君に対する忠節」、「忠義の心構え」であった^{二六}。人間社会の倫理を包括的に述べる儒教は、忠義の観念を中心として日本の武士社会に

おける道徳的規範と近似するものが少なくなかったために融合し、「武士道」と呼ばれる規範の体系を作り上げたが、本来「武」の道は「武士道」に先立って存在した観念である^{二七}。よって、中世における「武」の精神や道徳を「武士道」で説明することは困難なのだ。このことから高資の主張する「武」の道を、流布本と天正本が「愚案」と負の評価をつけることは矛盾していない。

本来的には対立しやすい「武」と「忠」の二つを、阿新は「武」の道に基づく行動によって「孝」を成し遂げ、「忠臣」を志すことで両立する。高資と道蘊の対立として描かれた儒教的倫理（「忠」と「武」は、阿新によって共存させられる。

次節では、構成⑤、⑥に該当する阿新と山伏の出会いから佐渡島脱出までを考察する。

三. 佐渡島脱出 山伏と「船辰伝説」

阿新は追手から逃れるべく、湊へと向かう。

ここに、山伏一人行き合ったり。

(西源院本)

阿新其日ハ麻ノ中ニテ日ヲ暮シ、夜ニナレバ湊ヘト心ザシテ、ソ
コトモ知ズ行程ニ、孝行ノ志ヲ感ジテ、佛神擁護ノ眸ヲヤ回ラ
サレケン、年老タル山臥一人行合たり。

(流布本)

…その日は麻の中にて日を昏し、夜になりしかばまた立ち出でて、湊の方へと志して、そこも知らず行くところに、年闌たる山伏一人行き合ひたり。

(天正本)

一人の山伏と出会うが、流布本でのみ阿新の孝行に感動した「佛神」の恩寵によつて湊に辿り着いたと語られる。このあと山伏と阿新の間で会話が為されるが、諸本によつて異なる。該当箇所を全文引用すると煩雑になるため、要点を次の表にまとめた。

表一 阿新と山伏の会話の流れ

| | | |
|--|--|--|
| 西源院本 | 流布本 | 天正本 |
| ① 山伏は阿新を寺院に仕える少年と思ひ、声をかける。 | 山伏は不憫に思つたのか、阿新に声をかける。 | 山伏は怪しく、気の毒に思つたのか、阿新に声をかける。 |
| ② 阿新は「師僧が暇をくれなために逃げてゐる、越後まで船に乗せて欲しい」と頼む。 | 阿新は、これまでの事情をありのままに語る。 | 阿新は、これまでの事情をありのままに語る。 |
| ③ 山伏は事情を聞いて、阿新を肩に乗せて湊へ行く。 | 山伏は事情を聞いて、「自らが助けなければ、より酷い目にあうだろう」と思ひ、湊の商人船に乗って越中・越後まで送ると申し出て、阿新を肩に乗せて湊へ行く。 | 山伏は事情を聞いて、「自らが助けなければ、より酷い目にあうだろう」と思ひ、湊の商人船に乗って越中・越後まで送ると申し出て、阿新の手を引いて湊へ行く。 |

西源院本でのみ、ありのままの事情を語らず、船で佐渡島を脱出させてほしいと頼む。山伏が阿新を寺院に仕える少年と思ひ込むのも、法師的要素を組み込もうとする西源院本の特徴によるものだろう。流布

本、天正本の阿新は、ありのままの事情を語つて、山伏に船で越中・越後への脱出を提案させており、山伏が情け深い人物として描き出される。

二人は湊に着くが、船着き場には船がない。どうしようかと探し回り、なんとか帆柱を立てる大船を見つける。山伏は喜んで、船に乗せてくれと頼むが、船頭は聞く耳を持たず、漕ぎ出す。山伏は大層怒り、数珠を押し揉んで、法力によつて船を祈り返そうとする。

山伏が船を祈り返す物語は『宇治拾遺物語』巻第三ノ四三二六「山伏、船祈返事」^{二八}にも載せられる。あらずは次のようなものだ。けいとう坊という僧が越前からふきで船に乗ろうとしたところ、渡し守が話を聞かずに漕ぎ出したため、けいとう坊は怒り、念珠を揉んで祈祷した。すると、振り返った渡し守が馬鹿馬鹿しいと思う様子を見せたので、けいとう坊は怒り狂つて「はや、打返し給へ」と叫び、二十人余りが乗る船を法力でひっくり返してしまう。「世の未なれども、三宝おはしましけりとなむ」と末法の世においても仏法の力は消滅しないと山伏の法力を讃えて締められる。本話のテーマである法験信仰は当時において一般的なものであるが、渡し守の態度にもみられるように法力を馬鹿にする風潮もあり、二つの思想の葛藤が語られる一篇とされる^{二九}。

阿新と山伏が船で佐渡島を脱出したことが語られて本章段は終わるが、末尾はそれぞれ次のように締められる。

阿新は、山伏の勤験によつて、鰐の口を遁れて、恙なく京都に上

りけり。

(西源院本)

阿新山臥二助ヲレテ、鰐口ノ死ヲ遁シモ、明王加護ノ御誓掲焉ナリケル驗也。

(流布本)

阿新殿は山伏に助けられ、鰐口の死を遁れ給ひしも、父資朝、年來熊野権現を頼み奉り、懇祈を運ばれし権現の御誓ひ、新たなる濟度利生の御恵みを、この時施し給ひけるにや、かの山伏掻き消すやうに失せにけり。不思議なりし事どもなり。

さて、阿新殿は恙なく成人して、南朝の君に仕へて、日野の一跡を光榮して、中納言国光とぞ申しける。哀れにやさしかりし事どもとて、聞く人も袖をぞしぼりける。

(天正本)

西源院本は無事に帰郷したことを山伏の法力によるものとして簡潔に語るが、流布本は阿新が助かったのは山伏の法力と併せて権現の冥加であると語る。他と大きく異なる天正本は、熊野権現のご利生であると強調し^{三〇}、阿新の後日譚を添加する^{三一}。つまり、西源院本と流布本は仏教的な恩によつて物語を締めるが、天正本は仏教的な恩と合わせて儒教的な恩返しをも語り、意識的に忠臣孝子の話としてまとめるのである。事実、南朝に仕え、活躍したとされる日野国光は、明治

時代に忠孝を実践したとして顕彰され、一九一五(大正四)年に正三位を追贈されている^{三二}。だが、阿新は「武士道」以前の荒々しく行動的な「武」によつて資朝への「孝」と共に、南朝に仕えて「忠」を全うしたのである。

阿新丸復讐譚は西源院本と流布本では、「孝」に道徳的色彩がみられる父子の物語であった。しかし天正本で「忠臣」の要素が加えられ、それは「武士道」における「忠臣」に読み替えられるようになり、阿新丸復讐譚は「忠臣孝子」の物語として解釈されるようになる。だが、本章段における「武」とは、儒教的倫理だけでは説明できない、中世における「武」の実践と捉えねばならない。

結語

以上、本稿では『太平記』巻二「長崎新左衛門尉意見事付阿新殿事」の「武」の道と儒教的倫理が対立する様を検討し、それに続く阿新丸復讐譚が二つの思想を共存させることを明らかにした。

まず第一節で、長崎新左衛門尉高資と二階堂出羽入道道蘊の議論では乱世における「武」の道と儒教的倫理である「忠」に基づく「臣」の道は対立していると示した。次に第二節では、阿新丸復讐譚における阿新の行動にみられる「武」とは「武士道」に当てはまらないと指摘した上で、高資と道蘊の議論では対立した「武」の道と儒教的倫理とは阿新によつて両立させられていると述べた。最後に第三節では、佐渡島脱出を比較し、末尾の「恩」の語られ方から阿新丸復讐譚の重点が、諸本によつて「孝」と「忠」のどちらかに置かれていることを

明らかにした。そして天正本の「忠臣」の人物としてのまとめ方を「武士道」に当てはめて解することは不適切であり、阿新丸復讐譚にみられる「武」とは、中世における「武」の道の実践であると論じた。

阿新丸復讐譚が、『太平記』のなかでも広く知られ、現代においても著名なのは、父子の悲哀の話として共感され、忠孝の話として喧伝されたためばかりでないように思われる。繰り返しとなるが「阿新殿事」は、「長崎新左衛門尉意見事」でみられた本来は対立する乱世の「武」の道と儒教的倫理である「忠」と「孝」を両立させて話の筋を構成する。荒々しい「武」の道と儒教的倫理が拮抗し、調和させられる過程に阿新丸復讐譚の醍醐味があるのではないか。本質的には対峙する思想が一つになり、少年によって遂行される筋に本章段の魅力がある。特定の人物の背景として歴史に還元するだけでなく、物語の流れに沿って読みとくことで、中世における「武」の道と「孝」、「忠」の関係の側面が浮び上がってくる。

『太平記』世界において「武」の道と儒教的倫理の対立が見られるのは、「長崎新左衛門尉意見事付阿新殿事」に限定されるものではないだろう。広い視野での分析、考察が必要だが、これは今後の課題として『太平記』を読み続けたい。

謝辞

本稿の作成にあたっては、長谷川端氏の注釈、「太平記巻第二」「阿新殿事」について」に多くを学ばせていただきました。記して感謝申し上げます。本稿は、沖縄国際大学大学院での『太平記』の講読をき

かけに作成したものです。

- 一 飯田豊「太平記「阿新殿の事」中の船戻傳説に就いて」『史苑』一（四）、一九二九年、三八三～三九二頁。
- 二 長谷川端「太平記巻第二「阿新殿事」について」『中京大学文学部紀要』第二五号、一九七三年、一～二三頁。
- 三 青木正次「太平記阿新譚小考―流刑の島をめぐる旅から―」『青須我波良』七、一九七三年、六一～六五頁。
- 四 『太平記』の構成は、永積安明『太平記』（岩波書店、一九八四年）に学んでいる。だが、一方で松尾剛次氏は『太平記』には、儒教的道義論と仏教的因果応報論が併存し、両者は対立関係にあるというよりも、補完関係にある」と三部構成説を批判する（松尾剛次『太平記 鎮魂と救済の書』（中央公論新社、二〇〇一年））。
- 五 近年の諸本研究に関しては、長坂成行「『太平記』諸本研究の軌跡と課題―一九九〇年代以降を中心に―」『平和の世は来るか―太平記』（花鳥社、二〇一九年）一八～三三頁を参照。
- 六 諸本の章段名は、「長崎新左衛門尉異見の事」（西源院本）、「長崎新左衛門尉意見事付阿新殿事」（流布本）、「長崎高資異見の事」（天正本）となっている。
- 七 天正本の表現を論じる長坂成行氏によると、天正本は一つの事象を記して解釈を享受者に任せるのではなく、著述者が何らかの評価、解釈を下す傾向にあり、他本よりも著述者の意識が全面に出ている特徴があるという。氏は「天正本の意識は、個人に対する同情・感傷、或いは感動など専ら私的な心情のレベルに終始し、たとえば時勢批判・政道批判といった公的な或いは高次な問題には至らない」、「このことは天正本が『見物』・『聞人』などの所謂享受者、恐らくそれほど高尚ではない大衆的聴衆との交渉を基盤に形成されたであろうことを予想させる」と述べる（長坂成行「天正本太平記の性格」『奈良大学紀要』（七）、一九七八年、一一～二〇頁）。
- 八 「武徳」は、「暴を禁じ兵をおさめ、大を保ち功を定め、民を安んじ衆を

やわらげ、財を豊かにする七つの威力」をもつと注釈される（兵藤裕己校注『太平記』一（岩波書店、二〇一四年）九三頁を参照）。前田勉『兵学と朱子学・蘭学・国学』（平凡社、二〇〇六年）によると、「御武徳」、「武威」の支配によって国家が治められるようになるのは、近世になってからである。近世の「武威」の国家の支柱となった思想とは、朱子学を学びながら、それに対抗するかたちで「武威」の国家支配のあり方を理論化し、兵学の道徳学化・政治学化を図った山鹿素行や荻生徂徠らの思想であったとされる。

九 大隈和雄「忠」『大百科事典』九（平凡社、一九八五年）七七四頁。以下、「忠」に関する記述は本項目に学んでいる。

一〇 大隈和雄「孝」『大百科事典』五（平凡社、一九八四年）二四四頁。以下、「孝」に関する記述は本項目に学んでいる。

一一 中国の制度のほか、仏教も「孝」を教えたとされる。「孝」の教えを取り入れることで中国に受け入れられた仏教は、日本に伝えられた際にも因果の理と合せて先祖や親を重んじるべきであると説いて「孝」を強調した。だが日本では、「孝」は親に対する愛情のあらわれとして理解されることが多かったため、中世の説話集や軍記物語に収められる様々な孝行の話は「道徳的な色彩」（親に対する子の義務）は弱いとされる。「阿新殿事」で語られる資朝と阿新の心情も、父子の愛情のあらわれとして描かれており、「孝」の考えは阿新の仇討直前と直後に語られるのみである。

一二 大隅和雄『日本文化史講義』（吉川弘文館、二〇一七年）七七〜七八頁。氏は「文学作品などを書いた公家たちは、主従関係を武家社会特有のものとする傾向が強かったため、従者に対する主人の恩情に満ちた振る舞いと、主人のために命を賭けて戦う従者の行動を、軍記物や説話の中に描き出すことが多かった」（七八頁）と述べる。

一三 「序」については、和田琢磨『『太平記』「序」の機能』『日本文学』六一（七）、二〇一二年、五五〜六五頁に研究史がまとめられており、本稿は和田氏論に多くを学んでいる。氏は、「序」が君臣論を強調するかたちながら『太平記』に「明君」が存在せず、「良臣」が僅かであることを指摘し、「『序』に示された理念が極めて理想的であるだけに、逆にそれと対置される乱世の様相を容易に看守できる」というようになっており、「『序』は乱世を映し出す鏡としても機能している」と論じる。大森北義『『太平記』「序」の

思想について」（一）、（二）も参照した。大森氏は、『太平記』「序」で「天命・徳治思想としてあらわれる儒教的政道論」は「鎌倉期から南北朝の公・武家権力の政治の場で具体的に展開していた思想」であると述べ、「君と臣が比較対照される形」の叙述は、為政者としての君と臣を対等に位置づけ、それぞれに徳、礼を求める「作者の思想的理念と歴史叙述の立場」が表われた叙述形式であると論じる。

一四 北村昌幸氏は、桃井入京に関する褒貶並列記事を取り上げ、「作品世界内部において、一つの意見がただちに別の意見によって相対化されるという、主義主張の交錯した雰囲気醸し出されていることは確かであり」、「太平記世界は作中人物たちの各々の主張のぶつかり合いで満ちている」、「こうした多様な意見を同時に抱え込むのが『太平記』であり、その中でこそ褒貶並列形式は最大限に機能するのである」として、その褒貶記事は僉議論争形式とも共鳴すると述べる（北村昌幸「第六章 桃井入京記事の方法」『太平記世界の形象』（瑞書房、二〇一〇年）三〇三〜三二二頁）。

一五 小秋元段「流布本『太平記』の成立」『太平記の世界』（汲古書院、二〇〇〇年）一六七〜一九一頁。氏は、五十川了庵が慶長八年に刊行した古活字本を祖とする流布本『太平記』は、慶長七年刊本を底本に、西源院本系や南都本系によりながら「記事の整備と集成を図」ったものであり、従来の「梵舜本から流布本へ」という流布本成立の概念を、「梵舜本→慶長七年刊本→慶長八年刊本」へと考えて、流布本の本文にあたる必要があると述べる。

一六 阿新の台詞は諸本によって大きな異同はないため、西源院本から引いた。一七 本問が父子の対面を許さない場面で語られる大まかな内容を次の表にまとめた。諸本により一つずつ異なる内容が語られているため、該当箇所には網掛けを施している。諸本の異なる箇所を左に引く。

「構成②本間山城入道が父子の対面を許さない」の流れ

| | | | |
|---|------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 一 | 西源院本 阿新は持仏堂にあげられるが資朝に会えない | 流布本 阿新は持仏堂にあげられるが資朝に会えない | 天正本 阿新は持仏堂にあげられるが資朝に会えない |
| 二 | 阿新の心情 資朝の心情 | 阿新の心情 本間が対面を許さぬ理由 | 阿新の心情 資朝の心情 |
| 三 | 資朝の心情 | 本間が対面を許さぬ理由 | 資朝の心情 |
| 四 | 作者による父子への同情 | 資朝の心情 | 阿新の心情と阿新による本間への非難 |
| 五 | 本間が対面を許さぬ理由 | 作者による本間への非難と父子への同情 | |

されば、四、五町隔てたる所だにも、同じき浮世と云ひながら、生を隔てたる事の悲しさよ。ましてやいはん、この世の別れとなりなば、多生を経とも、父子顔を見る事あるまじと、外までも思ひ知られて、
 涙流さぬ者ぞなき」

(西源院本)

情ナノ本間ガ心ヤ。父ハ禁籠セラレ子ハ未稚ナシ。縦ヒ一所ニ置タリトモ、何程ノ怖畏カ有ベキニ、對面ヲダニ許サデ、マダ同世ノ中ナガラ生ヲ隔タル如ニテ、ナカラシ後ノ昔ノ下、思寝ニ見シ夢ナラデハ、相看シ事モ有ガタシト、互ニ悲ム恩愛ノ、父子ノ道コソ哀ナレ。

(流布本)

阿新殿これを見て、泪を押へて、情けなの本間が心かな、父は禁籠せられて、我はいまだ幼し、たとひ一所に置きたりとも、いか程の事かあるべきに、父子の対面をだに許さず、まだ同じ世の中ながら、生を隔てたる如くして、尋ね下りたる甲斐もなき事よと、もたえ焦れ給ひしかば、げに理かなと覚えて、
 聞く人も袖をぞぬらしける。

(天正本)

西源院本は、死を間際にしても対面が許されないことから来世の運命にまで思いを巡らせて、父子への同情を語り、「涙流さぬ者ぞなき」と聞き手ま

で場を広げる。流布本と天正本は視座が異なるという大きな違いがあるが、文章が類似するので線を施した。西源院本と天正本の類似箇所は囲っている。西源院本では来世ですらも会うことは厳しいだろうと悲観的に語られたが、流布本では死後の墓の中もしくは夢の中でしか会うことは難しいだろうと語られる。天正本は、阿新自身が無念さを吐露するようにして、西源院本と同様に聞き手にまで場を広げている。

一八 西源院本と流布本の該当箇所には大きな異同がないため、西源院本を引いた。

一九 小松茂人『中世軍記物の研究』（桜楓社、一九六二年）九一頁。

二〇 流布本、天正本では阿新は障子を少し開けて寝所の中に蛾を入れたと語られるが、西源院本では「障子を玉唾にて濡らし、穴を開けて、蛾を内へ入れたりに」と語られる。

二一 本間三郎殺しについて、西源院本では最初盗賊の仕業と考えられるが怪しい人物が見当たらず、疑いの目が阿新に向けられるようになり、持仏堂に姿の見えないことから、番衆の疑いは確信に変わり、阿新は追われるようになる。流布本と天正本では「血ノ付タルチイサキ足跡アリ」（流布本）、「血の付いたる少き足跡ありければ」（天正本）と阿新の足跡が残されていたことから特定される。

二二 永積氏は、人物表現に着目して「とつさの機転に命をかけ、危い瀬戸ぎわから脱出して帰った、という少年の冒険行を、『太平記』は興味深く描き出しているが、この阿新の像も、また大塔宮の般若寺脱出と等しく悪党的なゲリラ世界の人物行動に引き寄せて描かれているのであり、後に説く桶正成の戦法こそ、その典型であって、乱世の危機を突破してゆく果敢な人物に共感を惜しまなかった『太平記』作者の得意の表現ということができよう」と述べる（永積安明『太平記』（岩波書店、一九八四年）八七〜八八頁）。

二三 葛綿氏は、巻一「関所停止事」で醍醐天皇が流通を開いたことを指摘し、「阿新殿事」での「サラサラ」「ヤスヤス」といったことばは「流通に対応する言葉」であって、本章段は「流通の挿話として読み解くことができる」と述べる（葛綿正一『平安朝文学論 表象と強度』（翰林書房、二〇一九年）四六三〜四七五頁）。阿新は佐渡島への行きも帰りも商人船に乗っており、まさに商品が流通する様と阿新丸復讐譚が広く知られる様とは重なる。本指摘は大変鋭く、興味深い。

- 二四 「武士道」、「武士」に関しては、西田直二郎『日本武士道——その歴史的研究——』（岩波書店、一九三六年）、佐伯真一『戦場の精神史 武士道という幻影』（日本放送出版協会、二〇〇四年）、笠谷和比古『武士道 その名譽の掟』（教育出版、二〇〇一年）、同著『武士道の精神史』（筑摩書房、二〇一七年）を参照した。西田氏は「朱子學はいふまでもなく武士教養の基本となり武士道は儒學の教ゆるところの人倫によつて武士たるもの徳行を説き、武士道の内容を豊かにもし、明らかにもした。武士の行爲の第一に忠孝を擧げ且つ日常の生活に於ての用意を説いた」（四四頁）が、「もともと武士道は、儒教、佛教の思想と趣を異にし、一つに民族的生活の裡に發生し歴史的な諸情勢の下に發達した精神であつて、儒教が孔子の教説に根本的な規範があり、佛教が釋尊一大の教法にその根元を有してゐるのと異り、一の信仰的な性格にまで進めようとしても、それには一定の教理を有するのではなく、日常の人倫の規範としてあつても、教祖やその紹述者が特別にあるのではない。それよりも日常の習性のうちから實現せられた人間行動を縁として、自らに見出す道義の批判であるところにその特色がある」（九頁）と述べる。中世武士の作法、名譽の觀念に関しては、笠谷氏の著書「第二章 中世武士のエートス——ものふの道、弓矢とる身の習い」（二〇一七年）に詳しい。「武士道において基幹のひとつとされる「忠」が、中世武士における「忠義」と同義であつたかの考察は、筆者の手に余る。中世における「武」の道については、今後も学んでいきたい。
- 二五 笠谷和比古『武士道 その名譽の掟』（教育出版、二〇〇一年）二二頁。
- 二六 前注、一七二頁。
- 二七 前注、「五 終章—自立せる戦闘者たちの名譽の掟—」一七一〜一九一頁。
- 二八 三木紀人、浅見和彦、中村義雄、小内一明校注『宇治拾遺物語 古本説話集』（岩波書店、一九九〇年）七八〜七九頁。小林智昭校注・訳『宇治拾遺物語』（小学館、一九七三年）一三七〜一三八頁。
- 二九 『太平記』において、船頭が山伏を馬鹿にする様が語られるのは西源院本のみである。「あれは何事する山伏ぞ。軽骨なる者かな」と嘲笑され、船頭が山伏に詫びたことも語られている。
- 三〇 本箇所について、長谷川氏は「かの山伏掻き消すやうに失せにけり」の一文の挿入によって、「阿新殿事」を熊野信仰に結び付けた「不思議」な話の系列に置こうと意図していることが明白に表われている」と指摘する

（注二、二〇頁）。

- 三二 長島成行氏は、天正本がもつ後日譚を載せる傾向は、「章段末尾に評語を付して話を締めくくる傾向と相通うものがある」と指摘し、それは享受者との問題からいえば「大衆的次元の要求の反映でもあるのだろう」と述べる（長島成行『天正本太平記の性格』『奈良大学紀要』（七）、一九七八年、一〜二〇頁）。

- 三三 大隈和雄『阿新丸』『日本史大事典』第二卷（平凡社、一九九三年）一〇六頁。

引用・参考文献一覧

- 青木正次『太平記阿新譚小考—流刑の島をめぐる旅から—』『青須我波良』七、一九七三年、六一〜六五頁
- 飯田豊『太平記「阿新殿の事」中の船戻傳説に就いて』『史苑』一（四）、一九二九年、三八三〜三九二頁
- 大隈和雄『阿新丸』『日本史大事典』第二卷（平凡社、一九九三年）一〇六頁
- 大隅和雄『日本文化史講義』（吉川弘文館、二〇一七年）
- 大隈和雄『孝』『大百科事典』五（平凡社、一九八四年）二四四頁
- 大隈和雄『忠』『大百科事典』九（平凡社、一九八五年）七四頁
- 大森北義『太平記「序」の思想について（一）』『古典遺産』第五〇号、二〇〇〇年、七一〜八二頁
- 大森北義『太平記「序」の思想について（二）』『名古屋女子大学紀要』四九、二〇〇三年、二九五〜三〇六頁
- 笠谷和比古『武士道 その名譽の掟』（教育出版、二〇〇一年）
- 笠谷和比古『武士道の精神史』（筑摩書房、二〇一七年）
- 金谷治『孟子』中国古典選第五卷（朝日新聞社、一九六六年）
- 北村昌幸『第六章 桃井入京記事の方法』『太平記世界の形象』（塙書房、二〇一〇年）三〇三〜三二一頁
- 葛綿正一『平安朝文学論 表象と強度』（翰林書房、二〇一九年）

- 小秋元段「流布本『太平記』の成立」『太平記の世界』（汲古書院、二〇〇〇年）一六七～一九一頁
- 小林智昭校注・訳『宇治拾遺物語』（小学館、一九七三年）一三七～一三八頁
- 小松茂人『中世軍記物の研究』（桜楓社、一九六二年）
- 後藤丹治、釜田喜三郎『太平記』一（岩波書店、一九六〇年）
- 佐伯真一『戦場の精神史 武士道という幻影』（日本放送出版協会、二〇〇四年）
- 長坂成行『『太平記』諸本研究の軌跡と課題——一九九〇年代以降を中心に——』『平和の世は来るか——太平記』（花鳥社、二〇一九年）一八～三三頁
- 長島成行『天正本太平記の性格』『奈良大学紀要』（七）、一九七八年、一一～二〇頁
- 永積安明『太平記』（岩波書店、一九八四年）
- 西田直二郎『日本武士道 ——その歴史的研究——』（岩波書店、一九三六年）
- 長谷川端校注『太平記』一（小学館、一九九四年）
- 長谷川端「太平記巻第二「阿新殿事」について」『中京大学文学部紀要』第一五号、一九七三年、一～二三頁
- 兵藤裕己校注『太平記』一（岩波書店、二〇一四年）
- 前田勉『兵学と朱子学・蘭学・国学』（平凡社、二〇〇六年）
- 松尾剛次『太平記 鎮魂と救済の書』（中央公論新社、二〇〇一年）
- 三木紀人、浅見和彦、中村義雄、小内一明校注『宇治拾遺物語 古本説話集』（岩波書店、一九九〇年）七八～七九頁
- 山下宏明校注『太平記』一（新潮社、一九七七年）
- 和田琢磨「『太平記』「序」の機能」『日本文学』六一（七）、二〇一二年、五五～六五頁